報　告

夢洲＝コアジサシのヒナがいた！

文　加賀　まゆみ（夢洲生きもの調査グループ・理事）
写真　夢洲生きもの調査グループ

4稿　9/20

写真-1　2区万博予定地の湿地で、コアジサシが2羽のヒナに給餌していた

6月25日の大阪市港湾局・大阪府市合同IR推進局との意見交換会で約束した現地同行視察は、その後悪天候にたたられ、やっと7月17日に実現できた。コアジサシがいなくなってすでに2か月が経過している。

当日、コアジサシが繁殖していた3区IR計画予定地に行くと、そこは連日の雨で広大な雨水池ができており、ボーリング調査の櫓も無残に水没していた。ここでは無事孵化していたとしても雨で全滅したかも、と思うほど、見事な環境の激変ぶり。これが自然というものなのか。「雨水のたまっている部分は、建物などの建設手順が、決まっていないので、盛り土を止めている」そうだ。この雨水は、汲みだすことはせず、自然に消えるまで待つしかないらしい。それならいっそ冬のカモのシーズンまでこのままであってほしい、と心の中で思う。鳥の声ひとつしない、静かで不気味な淡水池。その周りを、コアジサシ繁殖の証拠のひとかけらでも残ってないだろうか、と私たちは注意深く、調べながら回る。

「市民団体と同行しての確認はしました」という実績づくりで企画したものかもしれない。それでもこの同行視察は一歩も二歩も大きな前進だったと思う。紙粘土製の偽卵を砂利の間に置いて、「コアジサシの巣と言っても、地面の窪みに卵を産み付けるだけの、こんなにわかりにくいものなんです。」という私たちの説明で、現地で実際に卵を見つける困難さを実感してもらえた。これに先立ち、コアジサシ営巣地保護について取り上げたテレビ放映（NHK-BSプレミアム「ワイルドライフ」）の視聴をお願いしていたことも、かなりプラスに働いたと思う。その場で職員のほうから、「自分らもあまりよく知らなかったから、今年は残念なことになったが、来年は工事の様子をみて、ここなら繁殖可能という場所を決めて、積極的に繁殖を招き入れるようにしたい。その時には、ぜひ協会のみなさんにも協力してほしい」という言葉をいただいた。

このあと職員らと別れ、私たちはまた夢洲を簡単に見回った。2区万博予定地の湿地のなかに、「あの鳥はなに？コアジサシと柄が違うけど、別のアジサシ？」　帰宅後、超望遠レンズで撮影した写真を確認した調査メンバーが「コアジサシのヒナが写っています！」と驚きの発見を伝えてきた。写真には、ヒナ特有の羽毛柄をした2羽が、親鳥から給餌される様子が写っていた。工事、カラス、大雨、、、と、幾多の困難を乗り越え、この夢洲のどこかで、確実に次世代が命をつないでいる。なんと素晴らしいことだろう！

写真-2　港湾局・IR推進局・工事業者と同行視察（円内は模型の卵）

写真-4　赤い人工物の少し手前の中州に、コアジサシの親子がいた。

写真-5　2区万博予定地の湿地で、コアジサシがヒナ（左）に給餌していた。

写真-6　9月になるとシギ・チドリがどんどん集まってくる

今回の一連のやり取りで、私たち保全協会が大阪の自然を未来に良い形でつないでいくために、日ごろから真剣に活動していることを、行政側にはしっかり理解していただけたことと思う。8月中旬、ケーブルテレビが夢洲のコアジサシをニュースで取り上げた際、以下のような大阪市の談話が流された。「2025年の万博開催までに土地造成やインフラ工事を完了させる必要があることから、環境省の保全・配慮指針に基づき、工事区域においては繁殖防止対策を行いながら当初予定通り工事を進めるが、工事区域外においては専門家の意見もいただきながら、コアジサシの繁殖場所の確保についても検討していきたい」。

8月21日、第2回オンライン講演会は、夢洲の植物を調べておられる大阪市立自然史博物館学芸員の長谷川先生を講師に招き、「海岸・湿地植物から考える夢洲の生物多様性」をテーマに開催した。先生は、夢洲に偶然生まれた環境がいかに希少なものであるか、そして、環境さえ整えば、生物種は不思議と戻ってくるものだ、と説明された。（長谷川先生の研究は「都市と自然」次号で執筆していただくことになっているので、お楽しみに。）

私たちは昨年3回、今年はまだ2回しか植物調査を行っていないが、この少ない調査でさえ新しい発見があり、その発見を環境保護に生かす足掛かりが、少しずつではあるが見え始めてきている。

しかしどんなに調査しても、動きまわる生きものについての「存在しない証明」はできない。野生生物は、環境の人為的改変と季節の変遷の隙を突くかのように、予期せぬ形で侵入し、またあっという間に居なくなる。今年のコアジサシ繁殖行動を確認できたのは、5月の連休中に訪れた私たち協会グループだけだった。今年はさまざまな障害で、わずかな繁殖しか守ることができなかったが、今後夢洲を巡る社会情勢がどのように変化しようとも、今年の積み重ねを生かし、行政側が自然環境を、生物多様性を、開発の基本要件の一つに据えてくれるようになるまで、情報発信を続けたいと思っている。

夢洲は、未来の自然環境づくりの一大実験場。万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」。私たちは、この夢洲の未来に、生物多様性に富んだ素晴らしい「いのち」をしっかりとつなげていけるよう、切に願っている。